

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2696 号 2015.10.30 発行

### 発達障害児に好影響ボードゲーム 福井の男性開発「かたろーぐ」



福井新聞 2015年10月29日  
家族で「かたろーぐ」を楽しむ川口洋一郎さん（左）＝福井県越前市

福井県の男性が開発した親子の対話促進を狙ったボードゲームが、発達障害児のいる家庭や療育現場で、自己表現ができるようになり、コミュニケーションが深まったなどと効果が注目されている。

開発したのは県内のボードゲーム愛好会「ちゃがちゃがゲームズ」メンバーの川口洋一郎さん（39）＝越前市。家族と一緒にいてもテレビやスマホに興じ対話の機会が少ないため、会話が弾むゲームをつくろうと開発した。

ゲームは1人が出題者となり、「たべもの」「おしごと」などのテーマについて自分の好きな項目を順位付け。他の参加者が順位を予想する。1位から発表し、当たるとハート形の宝石を獲得。宝石を一番多く集めた人の勝ちとなる。

「かたろーぐ」の商品名で昨年販売したところ、半日で売り切れに。再び販売したが手作りの部品が多いため大量生産できず、品薄状態が

続いていた。この夏一部の作業を福祉作業所に委託して販売を再開した。

このゲームは簡単なルールで子ども同士でも遊べる上、相手の好きなモノを予想し話を聞くことで、相手の気持ちになれる。自分の考えを伝える練習にもなる。子どもと何度も遊んだ川口さんは「家族でも互いの意外な好みを知ることがあった」と話す。

こうした効果に療育現場が注目。「今までこうだと思っていた子が、違うことに興味があったことがわかった」（特別支援学級教諭）、「（会話が弾んで）子どもたちが人間関係を広げるきっかけになった」（発達障害児の支援団体）などの声があったという。

「かたろーぐ」は「すごろくや」のホームページで1500円（税込み）で購入できる。

### 【「空白」を生きる 若年性認知症】<1>高齢者施設になじめず

西日本新聞 2015年09月17日

最初の異変は2002年、61歳のとき。福岡県八女市の原口義昭さん（享年73）は妻トシ子さん（70）と営んでいた保険代理店の仕事で、通い慣れた客の家に行けなくなった。同じ用件で何度も電話し、客から苦情が来るようになった。

受診した脳神経外科では「年相応のもの忘れ」と言われたが、異変は続いた。別の総合病院で「若年性アルツハイマー型認知症」と診断された。定年なく働けると思っていた仕事は人に任せ、5年で廃業した。



2012年秋ごろの原口義昭さん（右）と、妻トシ子さん（デイサービス絆提供）

ステテコの上にパンツをはく。ゴルフ場で他人の下着を身に着ける。それまでできていたことができなくなっていく。自身の変化を察した義昭さんは「これからどうして食べていくか」と声を上げて泣いた。

介護保険サービスを使えるよう、要介護認定を受けた。デイサービス（通所介護）施設を3カ所ほど見学したが、どこも「親のような年の人ばかり」。

トシさんは「まだ何でもできるのにかわいそか」と思い、体は元気な義昭さんも「そんな所に何で俺が行かなんと」とあらがった。

体力もプライドもある若年性認知症の人は高齢者向けの介護サービスになじめず、初期段階では居場所を見つけづらい。結局、トシさんは2年間、義昭さんを1人で世話した。

「今までちゃんと生きてきて、おかしなところを見られたらかわいそう」と、近所にはひた隠しにした。トシさんの髪は抜けて坊主になり、眉毛やまつげまで抜け落ちた。介護を抱え込んだストレスだった。

若年性認知症は進行も早いとされる。義昭さんは家にいるのに「家に帰りたい」と頭を下げた。リビングの隅で用を足しているのを見たとき、トシさんの頬を涙が伝った。

06年、ようやく若年性認知症に理解のある社会福祉士川島豊輝さん（41）につながった。トシさんが「仕事に行こう」と川島さんが働くデイサービスまで送迎し、川島さんは「掃除しましょう」「今日の仕事は畑の草抜き」と職場を装って対応した。約1カ月で「よかところ」となじんだ。

それでも、次第に暴力が現れた。排せつ介助をする職員に殴りかかり、自宅でも靴を履かせるトシさんの頭をパンプスのヒールで殴りつけた。トシさんは逃げやすいよう夜も玄関の鍵を開けていた。川島さんが「介護される現実を受け入れられないから、プライドを守ろうとしていたのだろう」と受け止めた暴力は1年半ほど続いた。

川島さんは11年、若年性認知症の人を積極的に受け入れる「デイサービス絆」（福岡県筑後市）を開設。最期まで義昭さんに寄り添った。

義昭さんは発症から7～8年で言葉が出なくなり、穏やかになった。そして今年6月。大好きなベンチャーズの曲が流れる中、トシさんや娘、孫、川島さんに見守られて旅立った。トシさんは今、「悲しいこと、悔しいこともたくさんあったけど、いい人に出会えて精いっぱい介護できた。もっと多くの人に若年性認知症を理解してほしい」と振り返る。

65歳未満で発症する若年性認知症。若くして発症するため、病気に気付かずに症状が進んだり、社会的支援が受けられずに孤立したり、仕事を失って経済的に困窮したりする「空白の期間」が課題となっている。若年性認知症の人とその家族を追った。

### 【ワードBOX】若年性認知症

65歳未満で発症する認知症。2009年の厚生労働省研究班の推計によると、全国に約3万8000人で、平均の発症年齢は51.3歳。女性よりも男性に多いとされる。脳卒中が原因で起こる血管性認知症と、アルツハイマー病が大半を占める。40歳以上であれば介護保険を利用できる。

## 【「空白」を生きる 若年性認知症】<2>介護と育児と…家族疲弊

西日本新聞 2015年09月24日

平日の夕方、福岡市のパート女性（34）の声はとげとげしさを増す。家族7人分の夕

食作りと洗濯物の片付けをしながら、小学1年の長女（7）の宿題を見て、長男（4）と次男（3）を風呂に入れる。仕事と育児の両立を手伝ってくれると期待していた母（59）は、じっとソファに座ったままだ。



**若年性認知症の母（手前左）と子ども3人の傍らで、家事に追われる女性は座る暇もない**

昨年4月、母は58歳で「若年性認知症」と診断された。父（58）は東京に単身赴任中で、定年退職まで戻る予定はない。妹は結婚して神奈川県在住。2人暮らしだった母と祖母（82）を放っておかず、同居を決めた。今春、新築した自宅で、会社員の夫（33）と合わせ計7人で暮らしている。

育児と仕事だけでも大変な時期に、介護も女性の肩にのしかかる。「私も母ももっと年を取っていれば『今までありがとう』って、優しく介護できたかもしれないけど…」母の症状が進むにつれ、女性の神経はささくれ立つ。

振り返れば、母は3年以上前からおかしかった。メニューが浮かばないと毎日煮物を作ったり、同じ調味料を大量に買い込んだりした。次男を預けると、離乳食を食べさせたかどうかもおぼつかなかった。

更年期障害に伴ううつを疑ったが、育児に追われる女性は受診を強く勧められなかった。たまたま訪れた皮膚科の受付で認知症を疑われ、連れて行った総合病院で脳の萎縮が見つかった。

現在、要介護2。食卓で自分と家族の食べ物が区別できない。着替えと汚れ物も分からず、すべて洗濯機に入れてしまう。注意すると「分かつとう」と返ってくる。

平日はデイサービス（通所介護）、週末はショートステイ（短期入所）と、介護保険の範囲を超えたサービスに頼っている。次男にはぜんそくがあり、母子同伴で入院となるたびに母の預け先確保に奔走するなど、想定外の事態も起こる。

同世代の友人に悩みを分かってももらえないのもつらい。「介護する家族へのサポートがもっとあれば」。家族旅行もままならず、女性のストレスは限界までたまっている。

65歳未満で発症する若年性認知症は、介護する家族も若い。仕事や子育てなどと重なる例も多くなる。

認知症の人と家族の会福岡県支部（福岡市）が、若年性認知症の人や家族のために開く「あまやどりの会」。2カ月に1回の集いに最近、20～30代の若い参加者が目立つようになったという。就職活動中に親が発症し、就職先に悩む学生が来たこともあった。

本人も家族も認知症を受け入れられない。周囲に話せない。介護保険サービスの利用の仕方を知らない。運転をやめさせられない…。「まだ若いのに」という思いが強いからか、高齢者の認知症に比べても、介護する家族の悩みは深刻になりがちだ。

49歳で発症した夫の介護経験がある世話人の下田照子さん（68）は「誰かに助けを求めて思いを吐き出したり、情報を集めたりすれば、介護もうまくいくはず。絶対に抱え込ませず、孤立させない支援と環境づくりが必要」と訴える。

#### 〈若年性認知症の相談窓口〉

若年性認知症コールセンター＝（0800）1002707＝は、月～土曜日の午前10時～午後3時（祝日、年末年始は除く）。無料。認知症介護研究・研修大府センター（愛知県大府市）の相談員が対応する。「認知症の人と家族の会」（本部・京都市）＝（0120）294456＝の各県支部でも家族会や本人交流会を開き、相談に応じている。

### 【「空白」を生きる 若年性認知症】＜3＞収入減に介護費ずしり

西日本新聞 2015年10月08日

「ネクタイの結び方が分からない」。福岡市の男性（59）がこう言いだしたのは、メー

カー勤務だった53歳の1月だった。すぐに脳の検査をしたが「異常なし」。秋にもの忘れ外来を受診したが「年の割にもの忘れが多い」と言われただけだった。

翌年5月、ゴルフのスコアを付けられないことを周囲がいぶかり、かかりつけ医で「アルツハイマー型認知症」と診断された。大学生だった長男（27）と次男（26）、高校2年だった長女（21）にまだまだお金がかかるころ。妻（50）は「頼りにしていたものが崩れていく気がした」。長女は父親の変化を見るのがつらかったのか、帰宅が遅くなっていった。

若年性認知症の人が利用できる主なサービスや制度	概要	申請先	※高度障害状態のうち、若年性認知症は「中枢神経系・精神または胸腹部臓器に著しい障害を残し、終身常に介護を要するもの」に該当する場合があるが、要件は非常に厳しい
障害者手帳	認知症の診断で精神障害者保健福祉手帳が取得できる。税制の優遇措置があり、障害者雇用枠での就労も可能	居住市区町村の障害福祉担当課	
傷病手当金	健康保険、共済組合の被保険者が病気やけがで十分な報酬が受けられない場合に支給。標準報酬日額の3分の2が最長1年6カ月、支給される	職場の人事部など	
自立支援医療制度	認知症で通院する場合、医療費(薬代含む)の自己負担が原則1割に軽減される	居住市区町村の障害福祉担当課	
障害年金	公的年金の受給資格があれば申請可能。初診日に加入している年金により、受給額や申請方法が異なる	自治体の年金相談窓口、年金事務所など	
住宅ローン免除	加入者が「高度障害状態」と認められれば、住宅ローンの残りは全額免除	金融機関	
生命保険の高度障害保険金	「高度障害状態」に該当すると認められれば、死亡保険金と同額を請求できる	生命保険会社	

(認知症介護研究・研修大府センターのガイドブックより)

男性は負担の少ない部署に配置転換されたが「パソコンの前に座っている」だけの日々だったようだ。2010年の診断から1年後、「よくなったら出ておいで」と休職を勧められた。昨年1月に退職。傷病手当金と障害年金、それにたまたま妻が正社員として働き始めていたこともあり、何とか生計は成り立っている。

症状の進行は速く、今は要介護2。失禁が始まり、言葉もあまり出ない。それでも「加入者が死亡または高度障害状態になった場合、残りの住宅ローンは全額返済を免除する」とされる住宅ローンは免除されない。今も月12万円の返済がのしかかる。

一方で、介護費は膨らむ。妻は生計維持のため仕事を辞められず、週5日のデイサービス（通所介護）と週2回の宿泊サービスを利用している。介護保険の範囲を超える費用負担は月約5万円に上る。

男性の隣で眠る妻は夜、ほとんど眠れないまま、出勤することが多い。母を気遣う次男は地元での就職にこだわり、今も就職活動が続ける。妻は「今まで夫に任せたり、夫婦で相談したりして決めてきたことを全部1人で背負わなければならないのがつらい」と涙ぐんだ。

高齢者の認知症と違い、働き盛りを襲う若年性認知症で大きな問題となるのが、「大黒柱」を失うことによる経済的な打撃の大きさだ。14年に厚生労働省研究班が行った調査によると、就労経験がある人の約8割が自ら仕事を辞めたり、解雇されたりしていた。発症を

機に収入が減ったのは約6割に上った。

全国32団体でつくる「全国若年認知症家族・支援者連絡協議会」（東京）は今年6月、厚労省に若年性認知症に関する具体的な施策強化を要望。全国規模の実態調査や早期発見・早期治療の推進などと並び、若年性認知症と診断されても企業が配置転換などで在職期間を延長できるよう支援する制度の確立など、経済的支援の推進も盛り込んだ。

同協議会によると、「病院から障害者手帳の申請ができないと言われた」「家族も会社も知識がなく、傷病手当金や障害年金を受給できず、経済的に困窮した」などの声が寄せられている。当事者はもちろん、医療や福祉の現場でさえ若年性認知症に対する理解は十分ではない。

同協議会の干場功世話人（76）は「診断を受けた直後の初期が本人も家族も最もつらく、混乱し、支援が必要。ぎりぎりまで同じ会社で働き続けられれば症状の進行が抑えられ、経済的にも支えられるはず。特に、企業の理解を深めてほしい」と訴えている。

### 【「空白」を生きる 若年性認知症】<4>本人の思いに耳傾けて



西日本新聞 2015年10月15日  
オフィスビル内のデイサービス＝福岡市・天神の「天神オアシスクラブ」

約4600平方メートルの敷地に古い民家が2軒。畑にナスが実り、犬がほえる。熊本県荒尾市川登の「デイサービスわだち製作所」（定員25人）は介護施設には見えない。そこに若年性認知症の人たちが集まり、思い思いに時を過ごす。

「楽しかよ。うちにおっとかかあともむっけん（もめるけん）」と話す男性は広大な敷地を黙々と歩く。愛犬と一緒に通ってくる女性は「おしゃべりが楽しい」。職員を交えてマージャン卓を囲むこともある。

「お年寄りに子どもじみたゲームをさせたり、入浴や食事だけが目的だったりのデイサービスに違和感があった」。こう話すNPO法人「たまな散歩道」理事長の西村哲夫さん（61）が2011年4月、若年性認知症の人を対象に開設した。今春からは同県玉名市にあった高齢者向け施設も統合し、57歳から90代まで35人が利用登録している。

活動は押しつけない。「まだまだ働きたい」「もっと体を動かしたい」という思いを生かし、農作業をメインにスポーツも積極的に取り入れる。洗車や草刈りも利用者で行い、公民館や道路の清掃などボランティア活動にも取り組む。畜産業だった男性利用者に「牛を飼いたい」と希望され、ヤギを飼ったこともある。

「支援は本人の声を聴くことから始まる」と西村さん。昼食時にファミリーレストランに利用者を連れ出して、じっくり話を聴くこともある。穏やかに見える人も複雑な思いを抱えている。

「認知症の人は何も分からないわけではない。特に、若年性の方は記憶障害が軽く、自分ができなくなることを自覚している。だからこそ、自分の存在意義を感じていたいし、役に立ちたいという思いが強い」

福岡市・天神の福岡ビルにあるデイサービス「天神オアシスクラブ」（定員25人）は、若年性と初期の認知症を専門とする居場所の先駆けだ。01年5月、介護施設と分からない外観と立地にこだわって開設した。

陶芸や絵画、書道、健康体操などカルチャーセンターのようなプログラムを提供。入浴や送迎のサービスがない分、職員は利用者の思いにじっくり耳を傾ける時間を取れる。聞き取った言葉を家族に伝えると、家族の本人への接し方が優しくなり、本人も前向きになるという。

施設長の中島七海さん（65）は「認知症と向き合う人たちは、家族に言えない思いを抱えている。その言葉を聴き、理解し、受け入れられる場所が本当の居場所になる」と語る。

今年1月に決定した国の認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）に「若年性認知症施策の強化」が盛り込まれたこともあり、若年性の人を受け入れる介護施設は増えつつある。それでも「本当の居場所になりうる施設はまったく足りていない」と中島さんは指摘する。

「本人の思いを聴いて生かす若年性認知症のケアや支援が充実すれば、高齢者介護の充実にもつながる」。くしくも西村さんと中島さんの言葉が重なった

## 【「空白」を生きる 若年性認知症】<5完>支援者が希望をつなぐ



西日本新聞 2015年10月29日

「認知症SOSネットワーク模擬訓練」で、捜索に協力した参加者に声を掛ける若年性認知症の女性（中央）と永江孝美さん（右）

「私は当事者です。声を掛けてくださってありがとうございます」。9月下旬、福岡県大牟田市であった「認知症SOSネットワーク模擬訓練」に、若年性認知症の女性（65）の姿があった。

行方不明になった認知症の人を捜す想定で、行方不明者役に声を掛けた一人一人に笑顔で駆け寄り、丁寧にお礼を述べた。

女性は57歳で「若年性アルツハイマー型認知症」と診断された。59歳で運転免許証を返納し、自営の店を閉めた。「私の人生は終わった」と嘆いた。

そんなとき、大牟田市が全国に先駆けて独自に養成する「認知症コーディネーター」の永江孝美さん（62）と出会った。当時女性は要介護認定を受けておらず、公的支援につながっていなかった。

介護施設で働く看護師の永江さんは女性の不安を受け止め、家族の声に耳を傾け、主治医と連携しながら症状の進行に応じて介護サービスや支援につないだ。2010年に大牟田市で発足した若年性認知症の本人交流会「ぼやき・つぶやき・元気になる会」にも誘った。

出会いから5年。女性は症状が進んでも永江さんの顔と名前は忘れない。機会があれば認知症当事者として堂々と人前にも立つ。「どんな薬や注射でも治らん。でも、永江さんや交流会の仲間のおかげで元気になれた」と語る。

同じ認知症コーディネーターの大谷るみ子さん（57）は、昨年3月末に66歳で逝った若年性認知症の男性の自宅を今も頻繁に訪れる。残されたのは妻（48）と小学4年から高校2年までの娘4人。

父の発症当時、小1だった三女（13）は作文に「私は自分がお父さんに対してやった言動に今、後悔をしています…私はもう、父と会話することはできません。謝ることができません」とつぶる。そんな三女と思い出話をし「お父さんと一番似ているね」と語りかける。

昨年4月には長女（17）の高校の入学式にも出席。「10歳の四女が結婚するまで見届けたい」と言う。娘たちは大谷さんを「るみちゃん」と呼んで慕う。次女（15）は「父の認知症発症からの数年はつらいこともあったけど、それによって巡り合えた方々とのつながりはかけがえのないものとなりました」と振り返る。

大牟田市の認知症コーディネーターは現在、6人。認知症の人の尊厳を守り、住み慣れた地域で暮らしていけるよう、医療や福祉などのさまざまな支援を調整する。大谷さんら

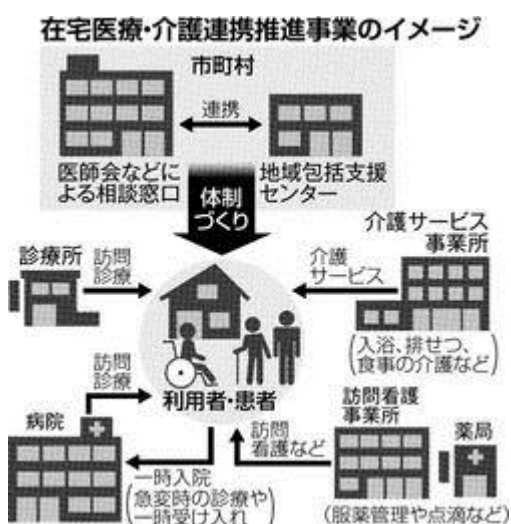
認知症介護の専門職と市が03年から養成を始め、これまでに104人がコーディネーターとして必要な研修を受けている。

コーディネーター養成にも携わる永江さんは「若年性認知症は『早期診断、早期絶望』となってしまうがちだが、希望を持って過ごせるよう支える伴走者に、より早く出会うことが必要」と訴える。

厚生労働省は、大牟田市のコーディネーターと同じように、認知症の人へのさまざまな支援を調整する「認知症地域支援推進員」を18年度までに全市町村に配置することを目指す。さらに、若年性認知症の人を支援する専門コーディネーターを各都道府県に配置する方針だ。大谷さんは「形だけでなく、当事者視点できめ細かな支援ができる仕組みにしてほしい」と指摘する。

診断直後の「空白」、症状が進んで仕事ができなくなったり、記憶が失われたりする「空白」、当事者が亡くなって家族に生じる「空白」…。若年性認知症の人と家族に訪れる「空白の時間」の伴走者となりうる存在が必要とされている。＝おわり

### 在宅医療と介護連携事業 道内市町村の半数未着手 北海道新聞 2015年10月29日



国が本年度から実施している「在宅医療・介護連携推進事業」で、道内市町村の半数が、国の求める在宅医療と介護事業所の連携策全8項目に着手できていないことが28日、厚生労働省の調査で分かった。全国では3割の市区町村が着手していない。町村部は医師不足で、在宅医療に取り組む医師も少ないことなどが原因。厚労省は「複数の自治体による連携が必要」として道の支援を期待する。

同事業は、地域の医療機関や介護事業所が連携して訪問診療や介護サービスを行う仕組み。市区町村は地元医師会などと協力して連携体制をつくる。厚労省は2018年春までに、すべての市区町村で実施を目指す。具体的には《1》医療・介護関係者の合同研修《2》連携する上での課題

と対策の検討《3》連携を支援する人材の配置—など8項目の実施を求めている。

ただ、厚労省が8月1日現在で集計した実施状況調査（速報値）では、8項目すべて実施していない市区町村は全国で28・8%。全項目を実施しているのは2・6%にとどまった。本年度中に何らかの項目を実施予定と回答した市区町村は8・6%。道内では49・7%の市町村が8項目すべて実施していない。

対策の遅れについて、厚労省老健局は「多くの市区町村が地元医師会と連携するのは健診などに限られているのが現状で、連携には時間がかかる。北海道は小規模な町村が多く、在宅医療に取り組む医師が少ない。複数の市町村による連携も必要で、道の支援は不可欠だ」と指摘する。

一方、道保健福祉部は「町村部のお年寄りにも在宅医療のニーズがあるか調査する必要がある」という。道内では冬に限って都市部の療養型病床のある病院や介護施設で過ごすことを望む高齢者も多いためだ。

道東のある自治体の担当者は「医師も介護事業者も忙しく、互いに顔を見て話し合う機会をつくるには18年まで時間がない」と対応に苦慮している。実際に「医師と介護職員の間で連携を申し出ても忙しいと感情的に断られ、関係がこじれたケースもある」（厚労省幹部）という。

厚労省は今後、先進事例の講習会などを開き、都道府県による支援を呼び掛ける考えだ。

#### (ルポ・あいち小児センター：4) 人との距離、守れない 心の傷と向きあって



朝日新聞 2015年10月29日  
距離守ってね」。抱きつこうとする女の子を、看護師が優しく押し返した

「お話があるので、子どもたちはプレイルームに集まってください」

心療科病棟に放送が流れた。不安そうに顔を見合わせる子どもたちに、看護師が話す。

「みなさん、最近距離が近くなっています。ここでのお約束、腕1本分の距離を守ってください」

虐待を受けた子の多くは、人と適度な距離をとるのが苦手だ。「あいしてる」などと言いながら記者に抱きつく子もいる。

中学生の女の子Bさんも「腕を伸ばして1本分」の距離がなかなか守れなかった。同年代の女子にくっついたり、看護師に抱きついたり。そのたび「距離近いよ」と注意された。

母親が彼女の喫煙など非行の相談にセンターを訪れたのが、入院のきっかけだった。話を聞いていくうち、育児放棄（ネグレクト）に近い状態で育ち、親戚の男性から下着に手を入れられる性虐待も受けていたことが分かった。

だれかれ構わずべったりするだけでなく、下着が見えそうな格好もしてしまう。性被害の子に見られる「性化行動」と呼ばれる症状も出ていた。

看護師に叱られても「いいじゃん」と明るく返す。そうかと思えば、壁を殴り、いら立ちをあらわにする時もあった。

「ほんとは荒れたいわけじゃないんだ……。明日からがんばる」

夕方、ぽつんとこぼしたこともあった。制御できない自分の心に言い聞かせているようだった。

#### ジェネリック薬の値段引き下げへ 先発薬の6割→5割案 厚労省方針

朝日新聞 2015年10月29日

厚生労働省は来年度から、後発医薬品（ジェネリック）の値段を引き下げる方針を決めた。現在は原則として先発薬の6割となっている公定価格を5割に引き下げる案が軸となる見通しだ。原則1～3割の患者の窓口負担は減ることになる。膨れあがる医療費を減らす狙いで、具体的な値下げ方法は年内に決める。

厚労省が28日の中央社会保険医療協議会（中医協）＝厚労相の諮問機関＝に見直しを提案し、大筋で了承された。診療行為や薬代の公定価格である診療報酬の改定に合わせ、来年度から値下げする。政府は後発薬の普及率を2013年9月時点の5割弱から20年度末までに8割以上にする目標を掲げている。普及率が8割になれば、医療費は年間1兆3千億円抑制できる。

後発薬は先発薬より開発費が安く、公定価格は公的な医療保険の適用対象となった時点で先発薬の6割と定めている。同じ先発薬をもとにした後発薬が10種類以上あれば、価格競争が起きることを見込んで5割に設定。一方、バイオ医薬品は、通常より研究開発費がかかるとして7割になる。

